南極

第２１号
平成１６年１０月２１日
南 極 倶 楽 部 会 報

## 宗谷ノート(3) ー 幻の利根川水路

高尾一三

1 次（1956 年）の航海で宗谷は南緯 66.5 度以南の南極海に入ってから約 1 週間の調査航海後いよいよ 1 月 16 日プリンスオラフ海岸（宗谷海岸「極地研 NEWS 164 号 p.12」）の調査に入った。そしてセスナ機を飛ばす開水面をもとめ南進を続ける。まずヘリコプターを飛ばし水路の調査にあたる。前方約 17 マイルに開水面を発見、その開水面で念願のセスナ機を飛ばす事が出来た。いまこの地では午後 11 時 30 分頃日が沈み約 2 時間後の午前 1 時 30 分頃日が出る白夜である。この日のセスナ機による約 3 時間にわたる調査飛行の結果、ラングホブデー帯の露岸を発見し、また南に向かい大陸からの定着氷に続く水路を発見した。この白夜の飛行は大成功であった。

17 日、船長の「これで調査は終わり突入だ」の弾んだ声、前日には船尾バラストタンクに約 144 トンの海水を張り喫水を深くして万全の備え、いよいよ 40 度線を南に突入した。

この東経 40 度線は（1）氷堤の断崖が少ない（2）岩が出ている（3）水路が開いている
（松本船長談）と云われ上陸候補地プリンスハラルド海岸への侵入線である。

その後は天候にも恵まれ、ヘリコプターの誘導によりオープンパックを南進する。時には氷山を迂回し時には密群氷を砕氷前進、南緯 68 度線を突破、18 日未明には東西に横たわる氷山の浮かぶ開水面に入る。この付近の開水面を一名利根川水路といい、当時の私の記録では概位、南緯 68.3 度、東経 40 度一帯に存在していた。ここから昭和基地まで南へ直線距離で約 40 マイルである。その後宗谷は、ヘリコプターの誘導により密群氷内の水路を求め、あるいは本格的な砕氷を行い南進し、25 日には大陸に続く定着氷に接岸した。

2 次の航海では南緯 68 度線を突破し、存在するであろう利根川水路を通り南下して大陸に続く定着氷に到達するのが夢であった。しかしリュツォ・ホルム湾の気象は宗谷にと

っては非情であった。その時の気象状況は‥‥

| 日時 | 最大風速 | 風向 | 航走距離 | ヘリ氷状調査 | 天気 |
|---|---|---|---|---|---|
| 12 月 26 日 | 3.2　m/s | EAST | | 2 回 | 曇り |
| 27 | 4.7 | WEST | 3.0 マイル | | 曇り |
| 28 | 4.5 | WSW | 9.0 | 2 | 曇り |
| 29 | 5.5 | NE | 11.8 | 4 | 曇り |
| 30 | 3.3 | SW | 2.8 | 2 | 曇り |
| 31 | 14.7 | ENE | 0.0 | | 曇りのち雪 |
| 1 月 1 日 | 15.5 | ENE | 0.5 | | 暴風雪 |
| 2 | 13.7 | EAST | | | 雪 |
| 3 | 8.7 | EAST | 0.0 | | 雪 |
| 4 | 5.2 | WEST | 100 (m) | | 雪 |
| 5 | 4.6 | WNW | 1.0 マイル | 1 | 曇り |
| 6 | 2.8 | ENE | 1.7 | 1 | 曇り |
| 7 | 7.7 | ENE | | | 曇りのち雪 |

上記で見るように突入後 5 日間は比較的安定した気象であった。しかし 31 日の瞬間風速 20 m/s に達する強風は宗谷の前進を阻み、その後 1 週間は前進極めて困難、一進一退を繰り返し遂に 1 月 7 日（南緯 67 度 45 分、東経 39 度 06 分）の位置で漂泊待機、以後ビセットの状態で 30 日まで 23 日間、西方に流された。31 日の強風は宗谷の砕氷能力の限界を思い知らされた現実であった。

2 次での南緯 68 度線突破の夢は遂に消えた。果たして利根川水路は存在していたであろうか。宗谷にとって利根川水路は幻の水路となった。この苦い経験から 3 次以降の人員と観測資財の輸送方法は、宗谷の短艇甲板を拡げヘリコプター甲板を新設、大型ヘリコプターによる輸送にきりかえる宗谷にとって画期的な変更を行なった。

12 月 16 日（2003 年）の朝日新聞紙上に“しらせ”船上から中山記者が次のような記事を送ってきた。「‥‥“しらせ”は、16 日午前 2 時現在、昭和基地から 65 キロの氷の海まで来た。南緯 68 度 47 分、東経 38 度 39 分。‥‥“しらせ”は前

日の 15 日、白く青く輝く大小の氷片が漂う流氷域に入った。その後、流氷のない湖のような海面に入った。大陸からつながる定着氷と流氷群のすきまにできた穏やかな水路だ。“しらせ”は一気に加速し、1 時間足らずで定着氷に到達。一面の氷の向こうに南極大陸が姿を見せた。」この水路こそ位置からして利根川水路に違いない。毎年この時期にある特定の位置に利根川水路のような開水面が存在するとすれば、自然の営みの中に生きている流氷の不思議さを見る思いである。（1～3 次　航海）

## 困ったコマーシャル

**星合孝男**

年のせいか、此の頃、どうでも良いような些細なことが気になる。気になるといつまで経っても、それにこだわって忘れられない。ここに書くことも、そんな一つである。

去年は NHK の人達が越冬して、南極の四季をテレビ画面に届けてくれた。今年の年賀状には「テレビで南極を見ました」と多くの方が書いて下さり、今更ながらにその威力を感じさせられたのであった。そして今年は朝日新聞の記者とカメラマンのお 2 人が越冬中で、時々朝日の紙面には立派な写真と、隊員のプロフィール、仕事やイベントの紹介記事などが載る。昔と変わらないと思うことも、「へぇ」と驚くこともあって興味深い。いずれにしろ、我々南極 OB にとっては、楽しみであり有難いことである。

しかし、朝日の南極放送活動に関連して、「困ったな。」と感じることがある。それは現地からの記事、写真ではなく、放送活動のコマーシャルに就いてである。既にお気付きの方も居られるかと思うが、コマーシャル中の朝日新聞南極支局に就いてである。問題のくだりは、日本国内で活動していた中山由美記者が、昭和基地を思わせる雪の世界をペンギンと一緒に歩く状景である。そして問題はこのペンギン、チンストラップペンギンである。ある文献に依ると、チンストラップの繁殖地域は南極半島や亜南極の島々であるという。また、これらの地域に加えて、南極大陸の東経 105 度－165 度の海岸を含む海域を生息地とする図があるが、これらのどの資料も昭和基地を含む南極大陸沿岸をチンストラップペンギンの生息地としてはいない。「ところで皆さん、宗谷、ふじ、しらせで昭和基地への往復途次、チンストラップをご覧になったことおありです

か。基地周辺でチンストラップをご覧になった方おいでですか。」越冬隊員だって、アデリーペンギンとコウテイペンギンしか見ていないはずである。そこでお願い一つ。皆さんご家族とご一緒にテレビ観賞中、もしこのコマーシャルに出会ったならば、ご家族、とくにお子様、お孫様に、「昭和基地にはこの種類のペンギンはいないのだョ。」とおっしゃって下さい。

「今頃になってそんなこと言ったって。」とおっしゃる方もおありだと思う。が、実はテレビだけでなく、この 3 月、朝日新聞読者サービス用印刷物に、このカットが使われているのを発見した。どうでも良いことかもしれないが、科学を標榜する南極観測に関連する活動に、明らかな誤りを含むコマーシャルはいただけない。こう考えて 3 月末に、旧知の朝日の元記者さんに、このコマーシャル何とかならないかと手紙を書いた。そして 10 月中旬の今日まで、その効果を待っていたのである。事情ご賢察の上ご容赦下さい。（16 次冬・23 次冬・28 次夏、隊長）

神田啓史
大学共同利用機関法人、情報・システム研究機構、国立極地研究所
〒173-8515 東京都板橋区加賀 1-9-10
Tel:03-3962-4761,Fax:03-3962-1525
E-mail: kanda@nipr.ac.jp

## ― 編集後記 ―